様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３７５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２８８９

研究課題名（和文）近世ベトナムにおける地方氏族：ゲアン地方における統治と対外交易

研究課題名（英文）Local clans in Early Modern Vietnam: Rules and Foreign Trade in Nghe An province

研究代表者
蓮田　隆志（Hasuda, Takashi）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：２０５１２２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：期間中に4本の雑誌論文、1本のブックチャプター（学術書）、学術雑誌の特集号1件、書評1本を発表し、9件の学会報告を行った。これらは主に3つに分類でき、1つは現地調査で得られた史料に主に依拠して地方社会を解明したものである。2つめは、ベトナム後期黎朝の政治外交史に関わるもので、ベトナム内外の1次史料を総合的に検討し、ベトナム後期黎朝の成立過程および初期日越外交の構造を復元した。3つめは2の派生的研究で、主要概説書に見られる朱印船貿易・日本町関係地図を集団作業で再検討し、修正代替案を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の主要成果として3点が指摘できる。1つめは近世ベトナム地方社会の様相を具体的な1次史料の検討を通じて復元し、ゾンホとよばれる氏族の重要性を再確認したことである。2つめは初期日越外交文書の検討を通じていくつかの書簡の差出人・宛先について新説を提唱したこと。またこれと併せて分析にあたって日本史でこれまで用いられてきた文書様式論を導入したことも挙げられる。3つめは日本町・朱印船貿易に関連する主要著作に掲載されている地図を最新の東南アジア史研究の成果に依拠して修正したことであり、歴史教育に対して大きな貢献となろう。

研究成果の概要（英文）：There are three outcomes derived from this project. First, findings concerning local society and local clans; secondly, papers concerning the political and diplomatic structure of the Later Le dynasty especially in the 16th to the early seventeenth centuries; the last is corrections made to the maps in major scholarly works on Japanese quarters in Southeast Asia.

研究分野：東洋史

キーワード：ベトナム　近世　地方社会　外交　古文書学　日越関係　後期黎朝

１．研究開始当初の背景

応募者は後期黎朝ベトナム（1533～1789）について研究を行ってきたが、平成 23～25 年度に受けた科研を含む既往研究にて、以下のような事実を明らかにしてきた。

(1) この時期のベトナムの対外交易に宦官が重要な役割を果たしているが、宦官は王朝官僚機構の正規の構成員として、軍事や民事など外廷に関わる分野でも活動を行ってきた。

(2) 日本の朱印船が来着するゲアン地方における交易においては、宦官だけでなく地元有力氏族も関与しており、彼らは貿易商人や貿易相手国の人間と独自に個人的紐帯を構築していた。

(3) 2013 年に発見された、現存最古の日越外交文書（1591 年）は鄭氏政権の有力者であり、ゲアンの有力氏族である阮景氏に属する武将が出したものである。

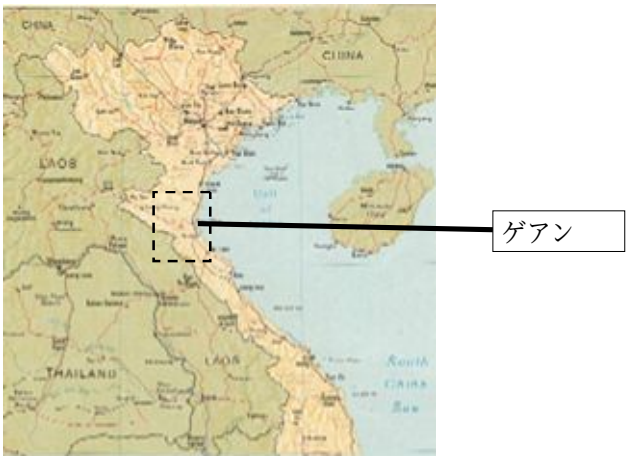
(4) ゲアンの北隣のタインホア地方では、王朝は早期から黎朝開国功臣子孫の取り込みを図っていた。

ゲアン地方は、後期黎朝が莫朝と抗争する中で後背地として機能し、約 60 年にわたる抗戦を支えた地域だが、17 世紀初頭から半世紀に及ぶ広南阮氏との戦争においては、一転して最前線となった。また、18 世紀初頭までの後期黎朝はゲアンとタインホアのみから徴兵しており、軍事力の供給基盤としても一貫して重要な地域であり続けた。にもかかわらず従来の研究（桜井由躬雄『ベトナム村落の形成』（創文社、2016）が代表的）では、村落史や地域史は紅河デルタに研究が偏在している。タインホアとゲアンとがハノイを中心とする紅河デルタと異なる地域性を有していると主張する Keith Taylor も、その最新の通史（*A History of the Vietnamese.* Cambridge University Press, 2013）において述べる特徴は「非官僚的」「農業のウェイトが低い」と言った形の概括的・消極的提示しかできていない。タインホアやゲアン地方の研究は後期黎朝の性格解明にとって重要な課題である。

２．研究の目的

一方、上記 1-(2)・1-(3) で示したように、ゲアン地方は海上貿易の拠点であり、日本との貿易も行われていたが、在地氏族が極めて重要な役割を果たしている。応募者はこれまでの研究から、後期黎朝時代のゲアンにおける対外貿易の実態は、中央・地方の有力者が貿易商人や相手国有力者と個人的に築き上げた権益の束であるとの仮説に到達した。これまでの研究で扱った宦官もゲアン地方土着の家系である。しかし、彼らは対外交易の利権を保持し地域で威勢を振るっていながらも、遂に領主化することはなかった。そこで問題となるのは、行政機構との対立・強調の双方を含んだ関係である。本研究では、既往研究をさらに進めてタインホアやゲアン地方の有力氏族について、（a）行政機構と氏族との関係、具体的には地方行政機構の役人となった族人の洗い出しや税役の収取・紛争などの場における両者の関係の解明、（b）対外交易との関わり、どの立場でどのように対外交易と関わったのか（許可状の発給など）、またその利益と族産との関係、王権との利権の調整などについて実証的に明らかにし、上述した仮説を検証することを目的とする。

関連地図



３．研究の方法

ゲアン地方にある両氏族の本宗およびいくつかの支派を訪ね、氏族所蔵の諸史料（族譜・勅封・公文書・石碑など）を収集する。ここで収集した一次史料を研究の基盤とする。また、ゲアン・ハティン両省博物館が所蔵する史料についても調査を行う（これらの博物館の所蔵史料については目録が公刊されていないため、現地で直接調べる必要がある。一部は既に、2013 年

に調査しており、阮景族の族譜があることを確認している)。これらの氏族所蔵史料には、既に影印や翻刻の形で公表されているものもあるが、2 面ある石碑の 1 面のみを掲載していたり翻字に多くの間違いがあったりするなど、その質に疑問符が付くものも多く、既公刊史料についても、直接現地を訪れて確かめる必要がある。

４．研究成果

期間中に 4 本の雑誌論文、1 本のブックチャプター（学術書)、9 件の学会報告を行った。そのうち、「范篤攷」並びに「近世ベトナムの地方社会における治安活動と下級武人」は現地での調査成果がより直接反映されたもので、前者は碑刻文、後者は文書を直接現地で調査した。これらの研究成果は研究目的の(a)に主に関係する。16 世紀の有力武将范篤の子孫は中央政界での栄達を得られなかったが地方の有力者として存続し、17 世紀中葉の功臣子孫への優遇策撤廃に際して、祖先の顕彰を通じて自分たちの権益保護を図ったと考えられることを現地での碑文調査によって従来の録文を訂正することを通じて提唱した。おなじく 16 世紀の有力武将頼世卿の子孫は、地方行政末端の治安維持機構を世襲化することによって自分たちの権益とすることに成功した。この世襲化と既得権益化の様相とロジックを地方文書の発掘と分析を通じて明らかにした。これらは筆者がかねてより主張している、16 世紀に登場した新興氏族の生存戦略パターンの多様性と地方社会における重要性とを裏付けるものである。「ベトナム後期黎朝の成立」においても現地調査で発見した 16 世紀の感状が家譜史料の信頼性を補強するものとして利用されている。

ゲアン地方と対外交易との関わりは「近世日越通交の黎明」において検討した。現存最古の日越通交書簡の差出人をゲアンの地方豪族にして地方軍政機構幹部である阮景端と推定した。この論文では日越で交わされた外交文書の文言を検討し、その用語法など文書様式論の観点から、儒教の知識や外交プロトコルに習熟した文人官僚による外交とは別に、ゲアン地方における交易のようなより通俗的な漢語を用いたコミュニケーションによって遂行され、情報のギャップを利用した虚々実々の交渉が行われる世界が存在していることを示すことができた。これによって日越交易だけでなく、近世の東・南シナ海世界における海上交易・海域交流史に新たな地平を切り開くことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4 件）

1. 蓮田隆志&米谷均「近世日越通交の黎明」『東南アジア研究』56(2)、pp.127-147、2019 年。査読有。doi: 10.20495/tak.56.2_127
2. 蓮田隆志「ベトナム後期黎朝の成立」『東洋学報』99(2)、pp.01-025、2017 年。査読有。https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/
3. 蓮田隆志「近世ベトナムの地方社会における治安活動と下級武人」『環東アジア研究』10、pp.34-49、2017 年。査読無。 http://hdl.handle.net/10191/47313
4. 蓮田隆志「范篤攷：16 世紀ベトナムの新興勢力と中興功臣」『東アジア：歴史と文化』25、pp.1-17、2016 年。査読無。

〔学会発表〕（計　9 件）

1. Hasuda Takashi. “Between trade and diplomacy: Adoptive son in the Japan-Vietnam relationship during the early seventeenth century.” International Workshop “Correspondence between Crowns: Asian Diplomatic Practice in the 17th-19th Centuries.” 20th Feb. 2019, Chulalongkorn University.
2. Hasuda Takashi. “Seal and Signature in Official Document during Early Modern Vietnam: Its Format, Usage, and Characteristics.” AAWH 4th Congress, 5th Jan. 2019, Osaka University Nakanoshima Center.
3. 蓮田隆志「称「安南国王」攷」第 100 回東南アジア学会研究大会、2018 年 12 月 2 日、東京大学本郷キャンパス。
4. 蓮田隆志「近世公文書における印と簽押：東アジア比較古文書研究にむけて」日本ベトナム研究者会議 2018 年度後期研究大会、2018 年 11 月 18 日、東京大学駒場キャンパス。
5. Hasuda Takashi. “Diplomacy without Embassy? Vietnam - Japan Relationship in the Seventeenth Century.” AAS 2016 Annual Conference, 31th March 2016, Washington State Convention Center.
6. 蓮田隆志「日本における近世日越関係史研究の成果と課題」国際シンポジウム「近世期日越関係史」、2016 年 3 月 19 日、ベトナム国家大学ホーチミン市校。
7. Hasuda Takashi. “Merchant and Adoptive Son: A Feature of Japan - Vietnam Foreign Trade during the Early Seventeenth Century.” International Seminar on Early Modern Vietnam - Japan Relationship: A Regional Perspective. 24th Dec. 2015, University of Social Science and Humanities, Vietnam National University, Hanoi.
8. Hasuda Takashi. “Regional Concepts, Regional Images and World Views.” Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In Honor of Professor Victor Lieberman's 70th Birthday. 16th

Dec. 2015, Osaka University.

9. Hasuda Takashi. “The Opening Phase of Japan – Vietnam Diplomacy in the Maritime Asian World: Through Introducing a Newly-Discovered Letter from Vietnam to ‘King of Japan’” AAWH 3rd Congress, 30th May 2015, Singapore: Nanyang Technological University.

〔図書〕（計　1 件）

1．　松方冬子（編）『国書がむすぶ外交』、東京大学出版会、pp.297-320、2019 年。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

1．　蓮田隆志「朱印船貿易・南洋日本町地図の再検討」『環日本海研究年報』24、pp.1-8、2019 年。査読無。

2．　蓮田隆志「書評：孫曉（主編）『標點校勘本　大越史記全書』」『環東アジア研究』10、pp.92-96、2017 年。査読無。

６．研究組織

（1）研究代表者

・蓮田隆志（Hasuda Takashi）

・立命館アジア太平洋大学

・研究者番号：20512247

代表者単独で遂行したが、現地調査においてはベトナム国家大学ハノイ校ベトナム研究・開発科学研究院の協力を受けた。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。